様式（第３条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都練馬区上石神井 3-1-9
園　名	ベネッセ上石神井保育園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

つみ木遊び

＜テーマの設定理由＞

（2 歳児）子ども同士の関りが深まってきた中で積み木遊びを通してやりとりする楽しさや思考力の深まりをも守っていきたい。今でも十分に積み木はあるが、種類を増やすことで子どもの遊びがより広がっていくではないかと期待している。
（幼児）友だちと協力して積み木を楽しんでいく中で、高さに対する興味やより強度に作っていく工夫などを出し合う様子を見守ってきた。これまでも積み上げたタワーの高さを測り、数字と写真で掲示するなどしてきた。楽しみながら数にも触れている中で、よりバリエーションのある積み方、子どもたちの工夫が出てくる姿を見守っていきたかったので今回テーマとして設定をした。

２．活動スケジュール

（2 歳児）
・十分な数の積み木を用意し、いつでも楽しめるよう環境を整える。（2025 年 8 月頃）
・写真で記録する。
・机上、積み木コーナーでそれぞれ積み木遊びを楽しむ。（2025 年 10 月頃～）
・色々な積み木を組み合わせて遊ぶ楽しさを実感する。（2025 年 10 月頃～）
・午睡時間などで担任間で振り返りをする。月末のクラス会議を通して全体にも発信する。保護者にはドキュメンテーションなどで知らせていく。

（幼児）
①　問いを考える（2025 年 7 月頃～）
どうやったらもっと高く積めるかな？
②　環境をデザインする（2025 年 8 月頃～）
積み木の量を増やすだけでなく、これまでにない種類の積み木を用意し遊びを広げていく。積み木を安定して積める床の素材を用意する。
③　探究活動を実践し、記録する（2025 年 8 月頃～）
様々な種類の積み木だけでなく、素材の違うソフトブロックなども混ぜて遊びの広がりを見ていく。
④　振り返る・共有する（2026 年 2 月頃）
積み木コーナーに作った時の写真と、長さをメジャーで測って掲示する。運動会などの行事でも保護者を巻き込んでみんなで楽しんでいく。

３．活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

（2 歳児）
子どもたちが十分に遊びこめる広さや場所の確保など、環境づくり。細かい積み木は色や種類ごとにカゴに入れることで子どもたちが安全に、使いやすいようにした。
遊びが融合する時と、敢えて少し離した方が良い時の見極めを行うようにした。
（幼児）
積み木を安定して積むことができる床の素材にし、カプラやジュエル積み木など様々な形・色の積み木を準備した。集中して積み木遊びに取り組めるよう、パーテーションでコーナーを仕切った。子どもたちの作品は写真を撮って壁に掲示した。

４．探究活動の実践　＜活動の内容＞

（2 歳児）
机上で遊べる細かい積み木と、以前から園にある積み木とを混ぜて遊ぶべきかどうか？
どちらのほうが遊びが広がるかを見守ってみた。机上よりも積み木コーナーで既存の積み木と一緒に遊ぶほうが遊びが広がり、子ども同士でのやりとりが多い姿から積み木コーナーに常設して遊べる環境を作り、見守るようにした。散歩後や夕方などに少人数から遊びが始まり、徐々に参加する人数が増えていくことが多くなった。

（幼児）積み木の種類が増えたことで積み方にバリエーションが増え、また床の素材によって安定して積むことが可能になり、今までよりも高く積み上げることができるようになった。天井に届くほど高く積むことができるようになってくると、横に広がるように積む姿がみられた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

（2 歳児）
初めは「なにこれ？」となかなか遊びが広がらなかった。保育者が「これはハチの巣ににてるね！これは何に見える？」と少し遊びを誘導するとそこからどんどん想像力が働いていた。積み木で建物を作ったり、森や町、お店屋さんを作ってケーキに見立てたりお人形の積み木のように歩かせたりごっこ遊びにも広がっていた。
（幼児）
「もっと高く積みたい！」という子どもたちの声が増え、どうしたら高く積めるか考えたり、実際に高く積んだ子の真似をしてみる子がいた。高く積むためには保育者の協力も必要不可欠なので、子どもが保育者に思いを伝え一緒に協力しながら成し遂げる経験をすることができた。それぞれの作品を認め合うことが増え、良いところを具体的な言葉で伝える姿も多く見られた。

５．振り返り

＜振り返りによって得た職員の気づき＞

（2 歳児）
机上遊びが好きな子どもたちだったが新しく積み木が増えたことで積み木遊びでの子ども同士の関りや想像力の働きもさらに増え、遊びが展開され楽しむ姿が増えた。
ひとつの活動に注目して記録したことで子どもたちの遊びの変化を感じることができ、子ども同士の関り、やりとりの成長も感じることができた。部屋が狭いため十分に遊べる環境作りを職員間で改めて考える機会にもなった。
（幼児）
高く積むことができるようになると、次は横に広がっていくということに保育者は気がつくことができた。遊びの可能性は大人の想像以上、子どもたちのしていることを丁寧に見守り続ける事の大切さに気付かされた。また、日頃の遊びから運動会への競技とつなげることができ、様々な形・素材の積み木を準備することで興味が長続きするということに気がついた。

様式（第３条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都練馬区上石神井 3-1-9
園　名	ベネッセ上石神井保育園

１．活動のテーマ

<テーマ>

指先のあそび

<テーマの設定理由>

手先・指先が器用になってきたことでこれまでの玩具での遊び方が変化してきた。積み木での造形が好きな子が多く、想像力豊かに遊べるような新たな玩具を提供したいと考えた。また、ぽっとん落としなどの手先を使った遊びを好んでいたが、物足りなさを感じる様子も見えてきたため、発達に合わせてより一層夢中になって遊べる手先遊びのコーナーを提供したいと考えた。

２．活動スケジュール

7 月～９月
・食事前や夕方の少人数で遊べる時間帯に設定し、『玩具に触れてみる』ことで興味を引き出す。保育者も一緒に遊びながら組み立て方を知らせていく。
・２歳児クラスの子との遊びの中で、年上の子の作品を見る中で遊び方を知っていく。
10 月～12 月
・個人の作品作りに集中できるように囲いを利用する。
・既存の玩具と組み合わせて、見立て遊びが広がるようにする。
１月～　　・友だちと共同での作品作りを楽しむようになる。

３．活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

・個別の囲いを用意して自分のスペースで安心感のもと集中して遊べるようにした。
・小人、汽車、車の木製玩具を一緒に設定した。（マグビルド）
・紙コップやおままごとの玩具を一緒に設定した。（のせのせストーン）
・遊びやすい量に分けるために個人のお皿を用意した。（のせのせストーン）

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

マグビルド

・はじめはタイルそのものに興味を示し、色ごとに集めたり並べたりを楽しむ。

・保育者がつなげ方を見せ平面で並べていたところから、立体へと変化していく。

・１人の男の子が『家作り』を楽しみはじめたところから、全体に遊びが広まり人形を用いた見立て遊びを楽しむ。

・友だち同士でタイルを共有しながら一緒に１つの大きな家を作るようになる。

のせのせストーン

・積むのも形を作るのも難しく、コップや容器に入れて食材として楽しむ。

・見本の並べ方から好きな形を保育者に作ってもらうことを喜ぶ。同じように並べてみる。

・ストーンを組み合わせて好きな形をつくってみる。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

マグビルド

・はじめは形を作ることよりも、透明なタイルの色の綺麗さに興味を示していた。色を言葉にだし、微妙な色の違いにも気がつき『似ているけど違う色』を何色と表現するか考える姿もあった。

・力加減が難しく、また両手で支えながら組み立てることに苦戦して立体を作ろうとしてもタイルが倒れてしまっていたが、保育者が支えながら組み立てるうちにコツをつかみ立方体が作れるようになっていった。また、ガシャンと崩れる音や様子を楽しむ姿もあった。

・立方体から三角を組み合わせて家づくりが広がり、次第に縦につなげてマンションにしたり、縦横複雑に組み合わせた家を作るように想像力が広がっていった。「ピンポーン」「どうぞ」「エレベータで上に行きまーす」など家庭での経験を遊びの会話に取り入れ、見立て遊びを楽しんでいた。

・はじめは平面に直線につなげて電車を走らせ線路として遊んでいたところから、立方体が作れるようになったことで横につなげて電車を作って走らせる遊びも楽しむようになっていった。

・それぞれの『家』『電車』を作ってお互いに「いいね」「すごい」と見合っていたところから、「ここ、こうしよう」など言葉で思いを共有したり、友だちの組み立てる様子を感じ取りながら、協力して組み立てるようになっていった。使えるタイルが増えたことで大きな作品を作ることが出来て「みてみて」と保育者や友だちと喜びを共有していた。

・三角を組み合わせて大きな三角や四角を作る姿も出てきて、元の形と違う形になったことを「さんかく」「しかく」と言葉にして発見に驚き不思議そうにしながらも、喜んでいた。

のせのせストーン

・夏から秋にかけては、並べたり同じ形や色を集めて遊ぶ姿はあったがまだ興味・関心が低かったため一度寝かせてみることにした。冬頃再び出してみると、細長いストーンを「ポテト」丸くて赤いストーンを「とまと」など、色や形の特徴を捉えておままごとの食材に見立てて遊びはじめたところから興味を持ち始めた。

・年明けごろから見本を飾ると同じように並べてみたり、自分なりに並べて「花」「顔」「車」を作るようになっていった。

５．振り返り

＜振り返りによって得た職員の気づき＞

【マグビルド】

もともと積み木で遊ぶことが好きな子が多く、高く積み上げたり家やトンネルなどを作っていた子どもたちだったが、マグビルドの組み立ては始めた頃は苦戦する子が多かった。積み木は片手でも乗せることが出来るし、強めの力が加わっても崩れづらいが、マグビルドは立体を作るためには支えが必要で両手を上手く使う必要があること、繊細な力加減が必要であることに気づいた。何度も崩れたり崩したりしながら組み立て方を知っていくことで、目と手の饗応能力を高まっていった。『弱い力』のコントロールも出来るようになっていった。

遊びが進む中で子どもたちのやりとりにも変化がみられていった。はじめは自分のタイルを保持することに気が向いてしまい『自分の』という主張が多かったが、遊びが進む中で友だちの作品に興味を持って「すごいね」「〇〇つくったの？」と話しかける姿がでてきた。友だちが作ったもので一緒に遊んだり、組み立てが上手な子のマネをして隣で同じように作ってみるようになっていった。「これ、あげる」「どうぞ」と自分が持っているタイルを譲り合って遊ぶ姿も増え、友だちの作品に興味本位で手を伸ばして崩してしまう姿がなくなり、お互いの作ったものを認め合う姿が見られるようになった。

【のせのせストーン】

複数人で遊ぶためストーンの数が豊富な方が良いかと考えて、はじめはケースごと出していたが、ある時試しにカゴに小分けにして設定してみると、遊びがぐっと深まったように感じた。選択肢が多いことで戸惑ってしまっていて、ある程度限られた数の方が、ひらめきが生まれやすいことに気がついた。

自由に形を想像して作る子も出てきたが、形を作るきっかけとしてストーンを上に置いていくと『動物』『車』『食べ物』などの形ができる様なサポートシートを今後作っていきたいと考えている。平面での遊びに慣れてきたら、積み重ねて遊ぶ中でバランス感覚も育んでいきたい。

様式（第３条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都練馬区上石神井 3-1-9
園　名	ベネッセ上石神井保育園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

自然

＜テーマの設定理由＞

日々自然豊かな公園へ遊びに行き、たくさんの生き物や自然に出会っている。捕まえてよく観察する姿から、一層深く自然を知る・考察する機会を設けたいと考えたため。

２．活動スケジュール

① 問いを考える（2025 年 7 月頃）
「この虫のここどうなっているのかな？」「花の中はどんな感じ？」身近な自然を見る中で生まれた疑問に寄り添い、一緒に考えていく。
② 環境をデザインする（2025 年 9 月）
虫かご、図鑑、虫メガネの他に実物投影機を用いてより細かく観察できるような環境を用意していく。
③ 探求活動を実践し、記録する（2025 年 9 月）
かたつむりを投影し、拡大して観察をしてみた。普段肉眼で見ていては気付かないような細かい部分もよく見えて、その後に図鑑で見比べる姿があった。子どもたちなりに振り返る様子を記録し、次の活動へと繋げていく。写真や動画に残して振り返りの材料にする。
④ 振り返る・共有する（2025 年 9 月～）
週に一度のクラス内会議で内容の振り返りを行う。ドキュメンテーションやブログを通して周りへ発信していく。

３．活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

散歩に行く際には虫かごや虫とり網、虫メガネを準備し持参した。保育室内には図鑑を用意し、捕まえた虫を図鑑で調べることができるよう環境を設定した。さらに実物投影機を用いて虫を観察する機会を設けた。

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

初めは捕まえて園で育てていたかたつむりを投影して見てみた。その後、冬になると霜柱や雪などの自然物を実物投影機で観察した。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

実物投影機でカタツムリを見てみると、「ザラザラしてそう！」「触角はこうなっているのか～。」と見た感想を言葉で伝えあう子どもたちの姿がみられた。定期的に実物投影機で投影して見たことで、雪が降った日には「雪も見てみたい！」という声が子どもたちからあがった。前日に降り積もった雪だったため雪の結晶はよく見えなかったが、だからこそ「自分たちで雪の結晶を作る」というところに繋がり、今保育者と子どもたちとで雪の結晶の作り方を模索しているところである。

活動の様子が分かる写真　２枚以上を貼付してください。

（HP など で公 開

する可能 性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

５．振り返り

＜振り返りによって得た職員の気づき＞

投影したものを見たことで、育てていた生き物への愛着も生まれ、大切にしようという気持ちが芽生えることに気がついた。また、一緒に図鑑を見るなど子どもたちと保育者のかかわりが増えたことで、次の活動につなげやすいと感じた。またそれを職員間で共有することで同じ方向を向いて保育をすることができた。

様式（第３条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都練馬区上石神井 3-1-9
園　名	ベネッセ上石神井保育園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

全身を使った遊び

＜テーマの設定理由＞

粗大運動が活発になってきて、様々な体の使い方ができるようになってきた。少し難しいことに挑戦する楽しさをたくさん味わっているところ。体の部位に意識をし、よりしなやかな体作りを促して行けたら良いとこのテーマを設定した。園内２階にちょっとしたホールがあり、広さはそこまでないがある程度集中して運動遊びを楽しめる空間がある。この場所をより有効に活用し、子どもたちの育ちに繋げていきたいと考えた。

２．活動スケジュール

・体の動きを自分たちでも考えたり意識したりすること。体って不思議だな、面白いなと感じられる活動を取り入れていく。
・広い環境の中で巧技台やマット、飛び石クッションなど様々な教材を組み合わせて自由に体を動かせるような設定を用意する。
・写真に撮って記録を残す中で、教材の組み合わせや難易度などについて研究する。子どもたちの発達の違いもあるので、体の使い方だけではなく遊び方の理解度についても個々の様子から丁寧に見ていくようにする。わかりやすい道具の設置があることで、跳ぶ・静止するなど、動かすだけでなく止まることの楽しさも感じ始めている様子。
・午睡時間中に担任間で振り返りを行い、月末のクラス会議でさらに深めていく。日々のコドモンで保護者に知らせていく。

３．活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

子どもたちが安全に十分に動き回れるような環境づくり、サーキット状にして子どもたちが一連の動きとしてできるようにした。連続でできるよう間隔を調節した。またトンネルも入れることで同じ動作が続かないよう上下して動く動きも取り入れた。

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

リング状のラバーシートを１個、２個と横に並べてけんけんぱとなるようにした。またプレイフルクッションは跳び石のように並べてその上を歩いてみた。両足飛びでも片足飛びでもできるようにした。そこに単体だけでなくトンネルも取り入れサーキットになるようにし、ジャンプだけでなくかがむ、しゃがむこともやってみた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

最初はジャンプ・両足飛びをして進んでいく子どもたちだったが、途中から片足ジャンプに挑戦する子どもやカエルジャンプをしてみる子どもたちがいた。また、サーキット状にし、トンネルも使ったので、ジャンプだけの動作だけでなくかがむ・しゃがむも取り入れすぐに飽きることがなかった。カエルの歌を歌いながらやっていた。保育者も片足ジャンプのやり方を見せたり、片足ジャンプを挑戦したい子の手を持ち支えながら行った。継続して遊びを提供していくことで、だんだんと体の使い方が上手になったり、工夫したりする姿が見られるようになった。

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。

（HP などで公開する可能性があ

りますので、公開可能なものを使用ください。）

5．振り返り

＜振り返りによって得た職員の気づき＞

最初は「出来ない」と嘆く子どもたちだったが、保育者が手本を見せたり一緒にやってたりすることで挑戦してみようとする気持ちが見られた。また片足ジャンプを見てみようとする子みた子どもたちが「私も！」とやってみる姿も見られた。大人やお友だちのやっていることを見ることで自分もやってみたい、憧れが少しずつ感じられるようになった。保育者のお手本を真似るだけでなく、子ども同士で学びあう要素もたくさんあるのだと感じた。活動を 1 回や数回で終わるのではなく長期でやったことで一人でできるようになった子どももいて成長を感じられた。継続して遊ぶことの大切さを実感した。

様式（第３条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都練馬区上石神井 3-1-9
園　名	ベネッセ上石神井保育園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

見立て遊び

＜テーマの設定理由＞

０歳児の遊びが活発になり、遊びの中で生活の再現をする様子がよく見られるようになってきたため。また、生活と遊びを結び付けて行く中で、子ども同士のかかわりや発語をうながすきっかけになればと思い、このテーマを設定した。

２．活動スケジュール

７月　おままごとに必要な空間とおもちゃの設置。
遊んでいく中で食材や食具に慣れたら丸テーブルの設置。
１２月　キッチンの設置と、食材・食器の見直しと補充
１月　主活動におままごとを取り入れる
２月　おままごとコーナーに食器拭きと洗剤ボトルの設置。
子どもの遊びを継続的に見守り、定期的に振り返りを行う。
その都度環境の構成等、改善を行う。

３．活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

布で作った食材と食具、食器を人数分用意し、まずはおままごとの道具に触れる環境を用意した。その後、キッチンを出すことで、よりおままごと遊びの環境を整え、子どもたちの持つイメージを再現できるようにした。食器はおもちゃではなく本物を用意した。

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

保育者が食具を使って食べる様子を一緒に遊ぶ中で見せ、おままごとのイメージを持てるようにする。子ども同士のかかわりを見守りながらも、おもちゃの貸し借りなどの際の仲立ちに入る。遊びを繰り返していく中で、保育者や友だちと一緒にご飯を作ったり、一緒に食べ、一人遊びから一緒に遊ぶ楽しさに気づいていく。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

・おままごと遊びを繰り返していく中で、一人遊びだった姿から保育者やお友だち、そしてぬいぐるみと見立てあそびを行う姿が見られるようになった。また、「ちょうだい」「かして」「どうぞ」などの簡単なコミュニケーションを遊びを通じて習得していた。

活動の様子が分かる写真　２枚以上を貼付してください。

（HP などで 公開する可能 性があり

ますので、公開可 能なも

５．振り返り

＜振り返りによって得た職員の気づき＞

・おままごと遊びにおいての道具の使い方など成長過程を見ることができた。 ・成長過程を見ていく中で、その時の遊び方をさらに広げていけるように保育者間で話し合うきっかけにもなり、それによってもとある玩具を増やしたり、新しい道具を増やす気づきにもなった。